

---

# ソラウラウララ

風来竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソラウラウララ

### 【Nコード】

N7496N

### 【作者名】

風来竜

### 【あらすじ】

屋上に行くと、そこには見えず知らずの少女が、フェンスの向こう側にいた。彼女は何事もないような顔でこんな事を聞いてくる「ねえ、私さ、今から死んでみようと思うんだけど？」短編青春物語。

「ねえ、私さ、今から死んでみようと思うんだけど？」

見ず知らずの少女が、見ず知らずである僕に、何事もないような表情で、そんなことを聞いてくる。

一瞬、聞き間違いかと思っただけで、すぐに返事をすることが出来なかった。多少遅れてしまい、すぐに返事をすることが出来なかった。

無視された、と思ったのか定かではなかったが、これ見よがしと言わんばかりに、後一步で十数メートル下の地面に真逆さまといった場所に立ってみせる。

そう、今僕がいる場所は学校の屋上であって、彼女が立っているのは、フェンスの向こう側。

そのまま数秒、呆然と彼女を見つめていると、痺れを切らしたのか、雲ひとつない青空を見上げていた顔をこちらに向ける。

「ねえ、聞いている？ 君に聞いているんだよー」

まるで今の状況を楽しんでいるかのような彼女の語尾に驚く僕の顔を見て、クスクスと小さく笑う。

「理解できないっていう顔してるね」

笑いながらそんな事を口走る彼女の顔をよく見てみたが、どうやら同学年の生徒ではなさそうだ。もちろん、AからEまである、合計五クラスの生徒全員の顔を覚えているわけではないが、入学式の春から、夏休みが過ぎた初秋の今、大体の把握はしているつもりだ。だからといって、断言できるほど女子生徒の顔を把握できている

つもりはない。むしろ三年間をかけても把握できる自信はない。  
じゃあ、なぜ、そう思うのか。

「……なんで笑ってるんですか？」

これから死ぬ、そう告げた人とは思えないほど綺麗な笑顔を持つ彼女の瞳は、頭上に広がる空のように青かった。

さすがに瞳が青い生徒が同じ学年にいれば、他クラスだろうと噂にもなり、多少なりとも僕の耳にも入って来るだろう。半年近く、現在進行形で高校一年生をしているが、そんな噂は聞いたこともない。きつと僕よりも上の二年生、もしくは三年生の生徒だろう。

同学年のクラス間の噂は周りやすいけども、学年間の噂はそこまで広まりにくい。それぞれ学年ごとのネットワークが違うのだからしょうがない。

僕の問いかけに、首をかしげながら真直ぐにこちらを見つめてくる。

不思議そうに。

可笑しいものを見るように。

そして、

「笑ってる？ 笑ってたら何か可笑的い？」

「え、いや、可笑しくないです、か？」

「うん、可笑しくない。可笑しいの？」

当たり前のように。

彼女のその答えを、その問いかけを、僕は理解することができなかつた。

それからまた十数秒、彼女と僕の間には沈黙が流れた。そして、新

しく出来た沈黙を破るのは、また彼女だ。

「よくさ、言うじゃんか。『自分の人生は自分で決める』とか、ね。私もそんな事を考えちゃうジャンルの人間なんだ」

今度は僕の方を見ないで、独り言を喋っているように、足元を見ながら喋り始める。

そこからの眺めは一体どんなものなんだろう。

そんな僕の考えを遮る様に、彼女は喋り続ける。

「だから私は思っただ。それじゃあ『自分の死に方は自分で決める』って……ん？ あれね、そういえばこれってよく考えてみると『自分の人生は自分で決める』と意味が一緒かも……アハハ、いやーまいったなー」

また、彼女は笑う。

輝くような笑顔で。

見ている僕が消えてしまいそうなほど。

はたから見れば、彼女は光で、僕は影。きっとそう見えてしまうに違いない。

「私の両親は、私がうんと小さい頃に離婚してさ、ずっとお母さん一人で育ててもらってたんだよね」

彼女は喋り続ける。話す声もトーンは変わらずに、また、独り言のように。

「お母さんは日本生まれのイギリス人で、日本語も日本人顔負けにペラペラに喋れて、得意料理は和風料理全般で、凄く美味しいんだよね……それに」

そこで一度止めてから、こちらに向き直って嬉しそうに一言。

「美人なんだよ」

自分の宝物を友達に自慢する子供のような顔で喋る。

嬉しそうに。

楽しそうに。

でも、少し悲しそうに、

「でも、死んじゃったの」

笑った。

また笑った。

何もかもを包み込んでしまうような。

でも、それはきつと無理やりに。

強引に頬を引き上げている。

「……僕にはそう見える」

「え？ 今なんて言ったの」

「あ、いや、なんでも、ないです」

口ごもる僕に近づくフェンス越しの彼女。

目と鼻の先にいる彼女の瞳は、驚くくらいに澄んでいて、吸い込まれてしまいそうなを必死に堪える。視線を外したいのに、外せない。彼女の瞳にはそんな力があるように僕達は逸らさずに、見つめあい、黙っていた。

数秒だったか、数十秒だったか、もしくはもっと長かったかもし

れないし、短かったかもしれない。

風の吹く音。

鳥の鳴き声。

自動車のエンジン音。

誰かが誰かを呼ぶ声。

その様々な音は耳に入ってきているはずなのに、鼓膜の一步手前で誰かがとおせんぼしているみたいに、無音な世界に感じられた。

「ぼ、僕は」

このまま、時が止まれば良いと思ったのは嘘じゃない。

「なに？」

だけど、沈黙を破ったのは、僕だ。

「今日、僕はここで、死のうと思ってました」

「……へ？」

「あ、あなたと一緒にです」

「それ、ほんと？」

「はい」

その時、僕自身がどんな顔をしていたのかわからないけれど、心臓は嘘みたいに早く高鳴り、倒れてしまいそうだった。

彼女は驚いた顔をしてから、溢れるように大きな声で笑い出した。

「あははははは……っ！」

お腹を両手の平で抑えながら、とめどなく溢れだすソプラノの笑い声は、心臓の高鳴りを鎮めてくれるように心地良い。

「そ、そんなに、面白かったですか？」

「ははは……だって、まさか、一緒の日に、まったく一緒の時間ここにきて、まったく同じこと考えていたなんて、偶然だとしても、なんだか面白くて……さ」

ひいひい言いながら、彼女は深呼吸をして息を整える。涙目になった目をこすってから僕に向き直る。

目と鼻の先。

フェンスという壁が無ければ、後十センチくらい。

「それじゃあ、一緒に死のうか？」

そんな恐ろしい問いかけも、笑顔で。

太陽みたいなの、なんていう表現はあまりにもありきたりすぎるかもしれない。だけど、そんな表現が一番彼女には、しっくりとくる。彼女の笑顔は影でしかない僕に暖かい光を注いでくれる。

何をしても駄目な僕に。

クラスのみんなから嫌われ、虐げられるだけの僕に。

「今日は……」

空から降り注ぐ太陽の光は、初秋のものとは思えないくらい暖かくて、背中の真ん中の辺りが汗でべたつくくらいで、それに伴って空は雲ひとつない綺麗な青空がどこまでも広がっていて、僕がちっ



ばけな存在だと改めて教えてくれる。

「うん？」

僕の命なんてたかが知れているだろう。

高校一年生の男子高校生が一人ここで死んでしまったところで、この学校は消えて無くなるわけでもないし、この町がどうにかなくなってしまうわけでもない、変わらずに地球は回り続けるし、世界の歯車は止まったりしない。

きつとそれは彼女が死んだことでも変わらないだろう。

人間が、一人二人死んでしまったからといって世界の何かが変わるわけがない、そんな事は誰もが考え付くことだし、知っていること。こんな僕にでさえ理解できること。

「空が、空が綺麗過ぎるんで、また今度にします」

でも、今は、この瞬間を、壊したくないし、壊れてほしくない。

「空が綺麗？ ……ぷっ、っあはははははは」

さっきよりも大きな声で、何か糸が切れてしまったかのように笑い続ける彼女は、仕舞いにはお腹を抱え込みながらしゃがみこんでしまった。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「くくくっ、大丈夫かって、そりゃ大丈夫じゃないよ、君」

そう言うってからフェンスに寄りかかるようにしてなんとか立ち上がった彼女は、涙目のまま、息を荒げたまま、口を開く。

「あはは。君さ、凄く面白いね」

「あ、いや、そんな面白いことを言っただけでもないんですけど……  
ど？」

そう言い終える前に彼女はフェンスを登り始めていた。二メートルほどあるフェンスをスルスルと軽やかに上り、その一番上に立つと、勢いよく地面に飛び降りた。

「ほいよつと」

僕の目の前に綺麗に着地してみせると、ゆっくりと入り口のドアの方へと歩いていく。

「あ、あのっ」

ゆっくりと、僕の方へと振り返る。  
なんで言い止めたのか自分でもわからない。  
もちろん口から言葉は出てこない。

「私も、今日は止めにするよ」

僕が何かを喋るよりも先に、そう言うってから彼女は人差し指を上に向けて。

どこまでも広がる青空のような瞳を持つ彼女は、少し皮肉に、また悪戯っぽく、

「だって空が綺麗過ぎるからねっ」

笑った。

(後書き)

読んでくださりありがとうございました。

感想などお待ちしておりますのでよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7496n/>

---

ソラウラウララ

2010年10月10日03時20分発行